

# キリスト一直線

## ルカ福音書 4 : 1 - 13

四旬節に入りました。教会によっては受難節というところもあります。この期節に私たちはイエス・キリストの受難と十字架にしっかりと照準を合わせて、向き合い、深く思い巡らし、悔い改めるときを大切にするわけです。

四旬節という期節が私たちに備えられ、与えられ、キリストの十字架と、そこにあらわされた神さまの深い深い憐れみ、尽きることの無い愛を強く、深く、しっかりと思い巡らせることは、私たちの信仰生活にとって、とても有意義で、有益で、重要で、大切なことだと思います。

普段の教会生活、信仰生活の中で、イエスさまが私たちの罪のゆるしと、救いのためにいのちを差し出してくださり、私たちのすべての罪を背負い十字架にかかってくださったことを、いつも心に留めておくことはキリスト者として当然のことだと思います。さらに私たちは、四旬節という備えられた期節があることによって、一歩も二歩もキリストの十字架に近づき、心を寄せ、集中するように導かれていると思うのです。たとえるなら、学生たちの試験期間のようなものかもしれないです。学生は普段から毎日勉強しているのですが、試験期間となれば更に勉強のギアを一段も二段もあげて勉強するでしょう。

そのように神さまが私たちのために備え、与えてくださった四旬節のとき、私たちは普段にもましてキリストの十字架を思い巡らしていくことで、信仰に磨きがかけられていく、神さまとの結びつきが強められていくのだと思うのです。神さまは私たちと、いつも、いつでも、いつまでも共にいて、支えたい、守りたい、導きたいと

思っていますから。。。

今日の福音書の箇所には、神さまの御心に忠実に、従順に聞き従いその身をどこにでも置いてくイエス・キリスト姿があります。

イエスさまは「聖霊に満ちて」「霊に引き回され」と聖書は言います。つまり神さまの御心のままに、悪魔の誘惑がまっている場所へ、しかも誰もがその身を置きたくないと思う寂しい荒野にイエスさまはその身を置かれました。

僕だったら「悪魔の誘惑があるところにも、荒野にも、行きたくありません。勘弁してください」と駄々をこね、断りを入れるかもしれない所へと、イエスさまは神さまのみ心のままに、従い、その身を置かれ、そこで神さまに心に向け続け集中する断食を40日間されました。

僕も3日間だけ断食をしたことがあるのですが、正直キツかったです。終わったときにはおなかが減りすぎてフラフラしました。イエスさまも断食した後に空腹を覚えた、といます。40日間の断食ですから、僕が3日断食してフラフラしたところのはなしじゃないです。相当弱っていたんじゃないかと思えます。そんなところに誘惑者が、今がチャンスといわんばかりに近づいてくるわけです。

マタイ福音書には誘惑する者を「悪魔」や「サタン」とも記してあります。とにかく誘惑する者の目的というのは、神さまとの結びつきを壊し、引き裂き、引き離して、信仰をなくし、絶望のどん底へとたたき落とそうとすることです。

悪魔はイエスさまに近づきいいました「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ」と。しかし、イエスさまは「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と即答しました。

イエスさまは、パンも大切ではあるけれど、そのパンを与えてくださる神を信じること、そして神さまのみことばに養われ、神さまのみことばに聞いて生きることの大切さを示すのです。悪魔の誘惑

は、神さまへの信頼を抜きにして、信仰を無しにして、パンを得ることへの誘いでした。

イエスさまは、「あなたは神の子なんだから父なる神にパンを祈り求めればどうですか」ではなく「自分の力で、石をパンに変えればいいじゃないか」という悪魔の神さま抜き、神さま無し、神さま無視の誘惑の危険性をはっきりと見抜いていました。

私たちは、私たちのいのちの営みに必要なものすべては神さまから与えられ、守られ、支えられているんだ、という確かな信頼と信仰を持って、神さまにより頼みながら、すべてをゆだねて、平安の内に過ごしていく者でありたいです。

悪魔は最後に大胆な誘惑に出ます。悪魔は、イエスさまに地上の国々の魅力的な繁栄ぶりを見せて、「ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」と誘惑するんです。イエスさまの答えは「退け、サタン。『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』」という一切妥協のない拒絶の言葉でした。

イエスさまは「あなたの神である主をおがみ、ただ主に仕えよ」といって、私たちがいつも、いつでも、どんなときも立ち帰り、向き直り、照準を合わせ続けていくところ、心に向け続け、信頼をおき続けていくところを指し示してくださっています。

いのちの源である神は、私たちに唯一無二のかけがえのない、大切ないのちの存在として、教え、諭し、育て、養い、助け、導きたい。救いたい。いつまでも共にいたい。だから神は私たちに、聖書のみ言葉を与え、御子イエス・キリストを与え、聖霊を与え、教会を与え、礼拝のときを与え、聖餐の恵を与え、祈りのことばを与え、四旬節などの期節も備え、与えてくださっている。

私たちが神さまから引き離そうとする誘惑は強くて、巧妙です。神さまへの信頼も信仰もなくしてしまおうとする誘惑は、私たちが弱っているときに、まるで荒野にいるかのような孤独なときにこそ

強く、激しく迫ってくるものがある。

だからこそ、私たちは神さまが私たちのために与えてくださったみことばや礼拝、祈りの一つ一つの神さまとの交わりのときを大事にし、キリストの十字架によって示された神さまの御心と、愛を思い巡らしながら、思い起こしながら過ごしていくことが大切なことです。

最後に悪魔は、神さまへの深い信頼を歌っている詩編 91 編の言葉を引用して、誘惑します。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。『神があなたのために天使たちに命じると、あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える』」と。しかし、イエスさまは悪魔の聖書の言葉の利用は誤りであることを明らかにするために「あなたの主を試してはならない」と即答します。自らの身を危機的な状況に置き、自分の都合のいいように神さまを動かそう、神さまを使おう、神さまを利用しようなんて言語道断であり、神さまの主権を侵すことになる。イエスさまは、神さまの主権、神さまの御心に聞き従うことが、神さまへの信仰の基本であるのだ、ということをはっきりと示されたのです。

私たちは、自分の思い通りに、都合のいいように神さまを動かそう、使おう、利用しようとなんてしちゃいけない。私たちは、私たちの罪のゆるしと、救いのために独り子のいのちさえも差し出すほどに私たちのことを思い、心配り、心砕き、愛してくださっている神さまを信じ、すべてをゆだねて、安心して、生きていけばいい。

私たちは、四旬節のこのときをいつにも増して神さまが与えてくださったみことばに集中していく、祈りに集中していく、キリストの十字架にまっすぐに、一直線に向き合っていきましょう。そして、神さまを信じて、すべてをゆだねて、みことばから力、勇気、平安をいただいて、心穏やかに、和やかに過ごしていましょう。

みなさまのうえに神さまの守りと、支えと、導きとが豊かにありますようお祈りします。